

# シリア動乱から学ぶ教訓

元・駐シリア特命全権大使  
国枝昌樹

「イラク・大シリア・イスラム国 (ISIS)」と名乗るスンニ派イスラム保守過激派の武装集団がイラク北方の都市モスルを襲撃し、2014年6月10日に同地方のイラク軍を壊滅させた。同市を瞬く間に陥落させ首都バグダッドを目指してイラク政府に圧力をかけると、風前のともしびとなったイラク政府ではマリキ首相が退陣してアバディ新首相が誕生し、米国政府はイラク政府の要請に応えて空爆を開始した。米軍の空爆に反発した ISIS がシリア国内の支配地域で身柄を拘束していた米国人2人を斬首してその模様を YouTube で公開すると、9月23日、国内世論と米議会の動向も受けて米国政府はアラブ諸国の参加を得てシリア国内の ISIS 支配地域とアルカイダ系ヌスラ戦線関係地域への空爆を開始した。

ISIS は6月29日にカリフ制の下のイスラム国樹立を宣言し、グループの名前も「イスラム国 (IS)」と改称した。そしてシリア東北部のクルド人居住地方に圧力をかけ9月中旬以降はトルコとの国境に隣接するクルド人居住地コバニへ軍事攻勢をかけ、世界のマスコミは町の攻防を連日報道した。IS (旧 ISIS) の躍進に世界は驚いた。

## 大同団結できないシリア反体制派

今日でもアラブ世界では多くの民衆、特に地方の住民が武器を所持している。シリアでは民衆蜂起が起ると、武器を持った一部のグループが当初から民衆蜂起を隠れみのにして活動し、次第に武装組織は増えていった。

反体制側組織にはそれぞれ独自の思惑を持った

トルコ、カタール、サウジアラビアなどが早くから積極的に武器と資金を支援し、戦闘員たちへの<sup>べいたん</sup>兵站支援を行い、さらには外国人戦闘員の参入に便宜さえ供与して政権側に敵対した。加えて欧米諸国が反体制派組織を支援する。政権側にはロシアと中国が外交的支援を与え、さらにロシア、イランなどが各種の軍事的支援も与えて反体制側武装組織と<sup>たいじ</sup>対峙。一進一退の激しい攻防が続くことになった。

トルコ、カタール、サウジアラビアなどは、チュニアやエジプトのようにシリアでもアサド政権が民衆蜂起と反体制派武装組織の活躍で短期的に崩壊するだろうと見通して反体制派組織の支援に突き進んだ。だが、その思惑は外れた。その大きな理由は、反体制派内のまとまりの悪さと人材難、広範な国民の支援欠如だ。それぞれのグループが独自路線に拘泥し大同団結が実現しない。全体を束ねるカリスマ性のある指導者もない。そこには各武装組織を支援する諸外国の思惑も反映している。多くの反体制派武装組織は次第に保守化しイスラム主義国家の樹立を主張し始めた。

反体制派武装組織との武力抗争の過程で、アサド政権は人口稠密で<sup>ちゅうみつ</sup>商工業の盛んな西部地域の確保にその軍事力を重点的に振り向け、ユーフラテス川以東への配分を低下させて兵力の温存を図った。シリア東部で政権の統治権力に空白が生じると、そこに ISIS が進出した。

ISIS の前身は「イラク・イスラム国」でありイラク内部の組織だったが、イラクとシリアを股にかけて活動し始めると、アルカイダのザワヒリ